氏　　名	三木　雅治
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第２９１号
学位授与年月日	平成２０年３月２４日
審　査　委　員	主査　教授　岩本喜久生
	副査　教授　冨岡　治明
	副査　教授　田中　恒夫

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

プロトンポンプ阻害薬(PPI)は、消化性潰瘍や胃食道逆流症等の胃酸関連疾患に対して最も強力な酸分泌抑制作用を有する治療薬である。PPI は、その作用機序から食前投与が望ましいとされているが、臨床では必ずしもそうではない。申請者は、製剤特性の異なる２種類のPPIを選び、常用量投与に比べて酸分泌抑制効果が内服のタイミングによって異なると予想される低用量投与時に、朝食後投与と夕食前投与での酸分泌抑制効果について比較検討した。健常男性ボランティア 20 名を無作為に、ランソプラゾール 15mg 投与群 10 名（*Helicobacter pylori* (HP)陰性例 7、陽性例 3）とラベプラゾール 10mg 投与群 10 名（HP 陰性例 6、陽性例 4）に分け、全例についてクロスオーバー法にて、無投薬時、朝食 30 分後投薬の 7 日目、夕食 60 分前投薬 8 日目の 24 時間胃内 pH モニタリング検査を３回施行した。酸分泌抑制効果は、24 時間、日中、夜間の胃内 pH≧4.0 の時間割合（%）で評価した。朝食後投与において日中の酸分泌抑制効果がやや強く、夕食前投与では夜間の酸分泌抑制効果がやや強くなる傾向を示したが、両薬剤とも、朝食後投与と夕食前投与の間で 24 時間、日中、夜間のいずれにおいても酸分泌抑制効果に有意な差は認められなかった。また、無投薬時、PPI 投与時のいずれにおいても、HP 陽性例は陰性例に比して強い酸分泌抑制効果を示したが、陰性例、陽性例ともに朝食後投与と夕食前投与の間で有意な差が認められなかった。本研究は、低用量 PPI の投与タイミングが胃酸分泌抑制効果に影響を及ぼさないことを初めて明らかにした点で臨床的意義が大きいと考えられる。